

用語集

▼ 〈コンテキスト〉(context)

「『文脈、前後関係、背景』の意。語や文の意味を限定し、明確化する働きを持つ。広くは作品の時代背景や作者に関する知識、また文学の伝統や慣習をも含む。〔中略〕ニュー・クリティシズムは作品をコンテキストから切り離れた。一方、R・バルトやJ・クリスティバによれば、存在するのはテキストだけということになる。⇒間テキスト性」(川口喬、岡本靖正編「コンテキスト」、『最新文学批評用語辞典』東京：研究社、1998年、104頁。)

▼ 〈ニュー・クリティシズム〉(New Criticism)

「1930年代から50年代まで、とくに大学の文学教育の場において支配的であったアメリカの文学批評運動。〔中略〕歴史的・社会的背景や作者の伝記的事実等から作品を切り離し、作品を自律的で統一性をもった有機的全体としてとらえ、形式と内容の二分法をしりぞけて、作品のもつ形式の分析を通してその文学性に迫ろうとした。〔中略〕パラドックスとアイロニー、ストラクチャー(構造)とテクスチャー、テンション、ジェスチャー等、いくつかの独自の用語を用いた。ニュークリティシズムの精読の習慣は他の様式の文学研究法にも多大の影響を残したが、60年代に入って、構造主義、読者反応批評などの台頭によって、発展的に解消した」(川口喬、岡本靖正編「コンテキスト」、『最新文学批評用語辞典』東京：研究社、1998年、202頁。)

▼ 〈テキスト〉(text)

「ある作品の本文。〔中略〕最近はとくに、作品(work)という言葉があらかじめ作者を予想させるために、作品という語を避けて、より中立的なテキストの語を使うことが多い。これは文学や詩という言葉を避けてエクリチュールという語を使うことと関係がある」(川口喬、岡本靖正編「コンテキスト」、『最新文学批評用語辞典』東京：研究社、1998年、184-185頁。)

▼ 〈間テキスト性〉(intertextuality)

「J・クリステヴァの用語。あらゆる文学テキストは先行する他の文学テキストと相互依存の関係にあるという考え方。クリステヴァによれば、孤立したテキストというものはなく、あらゆるテキストは他のテキストを吸収・変形させた、モザイク模様をした引用の織物であると言う。それは〔中略〕一つの種類の言説の意味が別の種類の言説の意味の上に重ね書きされること(⇒パリンプセスト)であると言う」(川口喬、岡本靖正編「コンテキスト」、『最新文学批評用語辞典』東京：研究社、1998年、62頁。)